

# 信 毎 俳 壇

## 坊 城 俊 樹 選

目出度きのふと玉ひゆく三が日

(埼玉真美里町) 川崎 彰典

初夢の父稚児の吾を膝に酒

(佐久市) 竹内 勝代

白黒のせめぎ合ふなり筆始め

(安曇野市) 丸山 進也

風花や余白を埋めるはやり歌

(佐久市) 町田ゆかり

風呂桶の底澄み渡り小晦日

(松本市) 伊藤 和夫

人の世の雑言めくし年の暮

(上田市) 田名綱 剛

広辞苑の上に眼鏡や春を待つ

(小諸市) 加藤 陽介

寒晴れや飛行機雲の短かきに

(飯田市) 大石 昭重

地下街に盲導犬の嘯かな

(愛知県犬山市) 紅紫あやめ

風もなくある日落葉になりました

(長野市) 北沢 亨子

佳作

妻とゐて珈琲香る冬山河

(大森村) 木戸口信幸

元朝やスツシリ重き新聞来

(飯綱町) 小林 紀子

選評

一句目、正月の3日ともなればこのような感覚もわかる。自由度いのは同じなのだが、元旦は少し前のことだったような錯覚は誰しもあるだろう。二句目、あまりにも切ない初夢。自分が稚児だった

頃の最愛の父のこと。膝の中に我を置いて晩酌をした遠い記憶。三句目、新年の縁起物としては、墨色の黒と余白の白のせめぎ合いは大切なものだろう。その真剣さがひしひしと伝わってくる。

## 今 井 聖 選

難聴の記憶の底の初音かな

(長野市) 福沢 ナナ

我が命地に預くるや日脚伸ぶ

(飯島町) 横山 真弓

きんとんをトーストに塗る四日かな

(須坂市) 東島賀代子

初雪や仔猫の尻尾濡るるほど

(上田市) 田名綱 剛

冬されや「黒いダイヤ」に沸きし頃

(佐久市) 木内利一郎

停戦を反故にして年改まる

(安曇野市) 平 至行

我が顔を覗くや猫の年始

(松本市) 小松 久志

頬杖は崩れ伏したる炬燵かな

(愛知県犬山市) 紅紫あやめ

揺り下ろしの林檎を我に呉るる妻

(佐久市) 西田 和彦

常連に場所譲らるる初湯かな

(長野市) 宮沢 朝子

佳作

底冷えや猫七匹を遺し死す

(松本市) 小林 幸平

稜線に切り取られたり冬の空

(大町市) 丸山めぐみ

選評

一句目、難聴の現在、記憶の底に貼りついている 鶯 の鳴き声は宝物のように思えてくる。二句目、地の上に生まれ、地の上で育つ「我が命」の上に春が近づいてくる。三句目、何にでもマヨネーズ

を付ける人をマヨラーと呼ぶらしいが、こういう組み合わせがあったのかと驚く。四日という季語もまさに。四句目、うっすらと積もった初雪の比喩として「仔猫の尻尾濡るるほど」が絶妙。

## 神 野 紗 希 選

白雲の凝る山徑初神楽

(長野市) 南郷 修二

満天の星の囁り雪兎

(長野市) 宮沢 信博

回遊ノ鮪オノレガダレカモウスレテ

(小諸市) 加藤 陽介

雪虫の降る聖人の微笑みに

(愛知県犬山市) 紅紫あやめ

冬薔薇やバンドネオンの音なつかし

(中野市) 川 寿男

冬あたたか夕月めつと横田なる

(伊那市) 小切 三郎

天狼や我欲買く独裁者

(松本市) 小林 幸平

棧橋の真つ直ぐ先の冬の富士

(松川村) 岡 豊村

眠れざる獣有めて山眠る

(大町市) 原田 勝

いぬぶぐり風りんりと吹いている

(上田市) 竹内 創造

佳作

大荒れの海の遅し初景色

(松本市) 後藤なつな

十八の娘の茶碗福寿草

(木島平村) 笑 夫

選評

一句目、冬の雲の硬質な印象を「凝る」と表した描写が見事。天地の懐で新年を舞う。二句目、屋に作られた雪兎が夜空の下、湯気と澄む間に、星々もまるで囁いているようにいきいきと輝く。ア

ニミズムの世界。三句目、回遊する鮪の忘我に心を寄せた。人間もまた、思考停止して流れに任せて生きてはいないか。四句目、雪虫も聖人の微笑みも清らなるもの。繊細な 儚さを丁寧に掬い上げた。